

ぢぐち 地口と狂歌の文学

——近世後期北武蔵地方庶民の身边から——

長谷川 宏

大里郡佐谷田村久保家文書のうちに「古今かゝみ 近代実録」と題する二冊の写本がある（文書番号三五八九および三五八八）。その二冊の内容は

卷之三 一、佐野善左衛門之事并田沼家遺恨（二二行）

一、田沼系図隠謀之事（二三行）

一、佐野政常大望思立之事（二〇行）

一、政常屋敷取方付之事、山城守江及刃傷之事

（三二行）

一、政常切腹并墓所之事（三五行）

一、孝子万吉伝略記（三四行）

卷之四 一、古今穀相場之事（四九行）

一、飢饉之事并餓死飢人救手段（本文にはなし）附落書之事（四二行）

一、飢渴諸説見聞之事附愚論（六一行）

卷之五 一、田沼稻荷堀中屋敷之事（三二行）

一、豊千代君西の丸江御入之事（二二行）

一、家治公御病惱二付町医師之事（二四四行）

一、御評詔之事付印幡沼願書（二一五行）（以上二冊）
卷之六 一、將軍家御他界之事（一三行）

一、主殿頭江被仰渡書付之事（四三行）

一、遠州相良城被召上事諸大名江御触流し書付之事

（三六行）

一、時口狂歌之事（一九九行）

卷之七 一、時勢之事（九七行）

一、江戸困窮之事（二二行）

一、久下堤三而十七屋追落に逢ふ事（二三行）

一、白川公御政事之事（四四行）（以上二冊）

卷之一・二は欠けているので、物語の発端はわからないが、いわゆる田沼騒動を主題にした実録物のひとつである。この田沼騒動物は、真偽は保証の限りではないと評価される読物で、「安明間記」をはじめとしていくつもの実録が庶民の読書家を喜ばせ、印幡沼開拓を扱った「嘘実夢物語」はあちこちに残っている。

田沼騒動物として最初に書かれたと見られる「安明間記」は、幡羅郡中奈良村野中家に残っている写本（文書番号二九九九）では全十五巻で、佐野善左衛門の切腹、奥方の剃髪で物語が終っているが、この「近代実録」は、最初どこから物語が始まるかわからないが、主殿頭の罷免から相良城の取上げ、松平定信の寛政改革に及び、第七巻第一章は著者自身が定信に大きな期待をかけていることを述べ、第四章では重ねてその政策を礼讃し、巻尾を次のように結んでいる。

伊奈撰津守 雖為挽割麦 不受町人之物

雖為買上損 不振代官之威

松平越中守

雖為賄賂 眼前取徳 必蒙権門之罰席

雖為学文 一旦町法 終当老中之上座

石河土佐守

雖為千日寄合勤 不聞邪見之訴

雖為此度奉行職 可成慈悲之捌

古今鑑大尾

なぜこの「近代実録」を拙文の冒頭に持ってきたかという、それは巻之六第四章の「時口狂歌之事」の紹介から本題に入りたいためである。この写本の底本は未詳であるが、どうもストーリーがわかればよいというダイジェスト的な写本であるらしく、底本の叙述をできるだけはしょって話の筋をたどろうとしようと思われる。それは各章

の下に丸括弧で行数を入れておいたが、とくに巻之六では他の三章の二倍にあたる行数が第四章に与えられているのがわかる。書写本が写される過程で次第に変貌してゆくことは、すでに多くの人に指摘されているが、学問研究の資料として影写本を作るならいざしらず、庶民の楽しみとして読書の過程で読者と書者とが混ざりあうことは、刊本が少なくて手に入りにくかった近世には日常茶飯のことであった。興がのつてくると、そこにプラスしたいものが浮んでくる。そして、それがプラスされれば、喜びは倍になる。幾度も書写を経るたびにそこがふくらむと、その結果は、他の部分、筋さえわかればよいという部分は次第に圧縮される。当然の結果である。

それからもうひとつ、「時口」という語について――。発音が同じ、時行、時好という言葉も地方文書に使われた事例もあるが、ここは地口の同義語として使用しているのかと解釈する。漢字本来の字義についてかなり知識がある筈だと思われる人でも、近世では漢字を音標文字的に使用している例が多いが、寛政改革に賛同したこの筆者でも地口を時口と書き誤ったと思うのである。あるいは地口と書くより、時口の方がびつたりだ、という見方も出て来そうである。「安明間記」を写した野中彦兵衛老はその奥書で

右の如くなる口合数多有る事、牛に汗し車二計る如し

と、口合という大坂流のいい方をしている。江戸流にはふうとう地口というようだから、地口にしておこう。地口は雑俳の世界にも流行したが、一般社会へも浸透した。これが「時口狂歌之事」の章をふくらましたのである。

では「時口狂歌之事」の章とはどんなものであつたか。

(本文)

古今 近代実録 卷之六
かゝみ

一、將軍家御他界之事

一、主殿頭江被仰渡書付之事

一、遠州相良城被召上事

諸大名江御触流し書付之事

一、時口狂歌之事

將軍家治公御他界之事

斯て將軍家御大切と聞ひけれハ、諸役人ハ勿論、諸大名惣登城也、御さじ方にも各々集り、色々秘術を尽すといへども其甲斐なく、次第に御病氣重らせ給ひ、奥向諸役人女中の面々、皆々御介抱無効断御三家御一門御機嫌御窺ひ、誠に深淵にのぞんで薄氷を踏思也、依て諸神諸仏の御祈り、諸国諸山の御代參、或ハ護摩を燒、種々の御祈禱怠らすといへども其印なく、終に九月八日巳刻御他界被遊ける、

実に國家の柱石くたけぬれハ、殿中上下泣詫る事限りなし、則日本國中浦々嶋々〔に〕いたる迄、普く鳴物御停止御触渡し、禽獸に至迨其音を止る事嚴重に見ひたり

主殿頭江被仰渡書付之事

一、其方儀若年より御側勤いたし、万事君之御情を蒙、御上之御意を笠二着て、日本諸大名江対し權柄を振ひ、其上名も無き庸医を手引いたし、君の御脳意御大切と成、終に御他界被遊候、其身も追々詰構之身分と成、せめての寸忠を立、御學問を敷申上、何卒御政事も御先代々様御同前の御成り立にも可被為遊心付、万端御中孝可申上処、無左して御側向御嘶も不申上候様ニ嚴敷申付、小兒も同前に御仕立、御政事之筋合は夢ニも御存知不被遊、唯御物好の所何をか以て付込、年々邪智をめぐらし、近年の出頭ハ皆其方の引方なり、剩、召仕之妾を立身の媒となし度々登城為仕、色々之事をはかり、悴山城守御奉公、年功も無之を智を以て若年寄ニ召出し、是又寸徳有之候得は尤之儀也、只親之權威を借り、諸家之金銀を貪り人之宝を奪ひ、己か為に佐野善左衛門横死す、東照宮以来より忠臣の佐野家、断絶いたす事、皆、其方之なす処也、御殿中勤方言語尽しかたし、年々己か權威に相募、誠二一天下の政事吾人にして御簡略と申、名目を立、御前より初、口附のもの其外一切の御用向不殘代金ニ拘り、自然と己か貪欲と相成候、是等ハ誠ニ以て冥加恐しき義也、扱又下々在々土民の手前より運上を取立、万民之難儀、一統に御上を恨ミ奉る事、此儀みな其方

仕方近頃不屈之義也、其方御役屋敷并中屋敷に至迄美麗を尽し恣をなし、其身栄花の樂を致し、御上を不恐、御上の御威勢おとろへ、己か威勢日々に募り、不屈至極の振舞、重罪たるへきもの也時に天明六閏十月五日、田沼主殿頭并松本伊豆守、御奉書を以て被召出、則御列座御役人ハ、御月番牧野越中守宅江出会、伊井掃部頭・松平周防守・水野出羽守、大目附宮本内膳正、御目附松平对馬守也、此節主殿頭病氣ニ付、御先手鉄炮頭城帯刀名代として被召出、越中守被仰付けるは、先達而御役御免被遊候得共、兼而思召有之二付、兩度御加増貳万石被召上、次ニ大坂藏屋敷も此度為御用可差上、尤只今適居屋敷も家作共ニ差上可申段申渡されける、帯刀難有御請して退出、松本伊豆守ハ若年寄大田備中守宅江被召出、神保内記・井上助之進相つめらる、伊豆守名代として御勘定組頭若林市右衛門罷出、酒井石見守被申渡けるは、此度思召有之、御役儀被召上、知行貳万五千石被召上、代々小普請入被仰付、急度相心得候様ニ被申渡、畏而御請申上退出いたしけり

相良城被召上事

閏十月十二日、田沼能登守御書院江被召出、溜の間に於て御老中御列座にて、牧野越中守被申渡けるは、田沼主殿頭御役中不政道の取計ひ有之二付、貳万七千石被召上、嫡子山城守子龍助に新知壱万石被下置、主殿頭儀蟄居被仰付、此段急度相慎候様、次ニ遠州相良の城被召上候、近日受取役人指遣し候間、承知いたし引払可申段被仰渡けり、右城受取役人として岡部美濃守在番可致旨、於同所牧野越

中守被仰渡之、御使番ニハ永井伊織、御書院番白須甲斐守組久留米十左衛門、相良城引渡として被遣、右之旨御祐筆部屋椽側におゐて、御老中若年寄大目附列座にて牧野越中守被申渡ける、又大小名江被觸出けるは

一、此度田沼主殿頭、御上之思召を以、只今迄之領地不殘被召上、蟄居被仰付、尤御先代御取立ニ付、慈之御旨も有之候間、嫡孫龍助ニ新地壱万石被下置、猶亦遠州相良城も被召上、差扣罷在候段被仰渡、尤主殿頭親類たるもの有之候共、是又一切御構ひ無之候、此段何も可相心得旨、御老中・若年寄・大目附其外諸人列座にて被觸候条、可被得其意候、以上

愚評に云、邪ハ元より正に敵セざるものといへとも、其時の勢にて、邪をとりひしく事成がたし(頭書注「田沼家 日本諸士是也」)却而邪に押られて正(勳)うごくことあたわず、然共正止事を得ず、信義の助けきざす時ハ、邪天下の権を執といへども、正心の一勇士に敵しかたし佐野氏 山城守是也是又人々一身の上にこれ有、酒色財博奕の四敵ハ邪念の大本也、此内一ツ盛に権威を執る時ハ、正心制することを得ず、方寸の天の岩戸に引籠て、一身の天下小天地常盤闇と成、此時眼耳鼻口手足共に皆邪にして敵しがたし、父子兄弟朋友の神々疎に、依之纒(末)ニも信義の心出る時ハ、勇氣出て岩戸をひらき、手足のすへく(末)に至迄、仁義遜讓の動止(マコ)と成、面も白く見へわたり、恥を知て正道行るへし、嗚呼、人間と生れてこゝらのかね合を知らざるものハ、惜ひ哉、田沼家御取立に預りて、臣として上も無き立身有ながら、君

御他界御見送りさへならさる身と成ハ何とやいわん

時口の事

天明三年浅間荒の時分出し(機関)からくりの口上書、是全く末を察せし人の作と見へたり

(東西)トウダイくさて御目通りにかさり置ましたる人形の儀ハ、田沼の積

り細工にこさりまして、詞に随ひ働きます、先、最初ハ上州の体(てい)に御さりますれば、五色の絹糸を御益として上へ巻上ますれハ、下にハ騒動か出来ます、是三ヶ年の金合(兼)にて御さりますれハ、仕損しハ

何ケ度も触直し御覧に入ますサテあなたの一ッ橋よりむかふの石垣の内へのぼりますれハ、又はるかむかふの薩摩より、こなたの一ッ橋

へうつります、是、首尾(よく)能まいますれハ、内証にて壱万石出ます、サテ銚子のけしきと替りまして、渺々たる印幡沼も人扶多勢(た)にて掘揚

ますよふす、段々と掘上ますれハ、山々より黒雲か出まして一面に雨をふらせまして、人形ハ悉く元の座へ返りますれハ、跡は晴天に

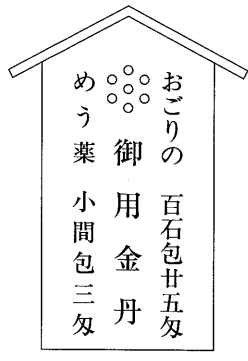
なります、それより千河の水を本郷江引上ますれハ、逆落しに下谷へ流ます、此節關所運上の金銀ハ不残出しまして働きます、跡ハあ

き蔵と成ります、それより両替屋・酒屋・質屋・青物屋等より急に新運上を取上、明箱を埋めます手段にこさります、次に替ります

るか信州浅間山の風景、是も変しまして山嵐砂石灰を降しますれハ、四ヶ国さんく(兼)に成、又泥を吹出して吾妻川・利根川数拾里のあい

た流死のもの数万人、細工の難儀御氣を付御覽被下ませう、是も変じまして、御手伝ハ七合八合の金合(兼)にて、金納と成ます、金銀上へ

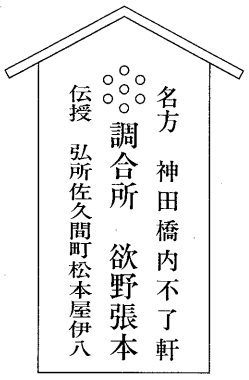
引上ますれハ段々とつまり困窮の体、ミな様御用心被成御覽被下ませふサテ最初よりたくみを入かへまして荒々仕あふせますれハ、初の七ツ星をつけたる人形に腹を切せ、むかふの吹流に文字かあらわれ、世か直りますれハ、さふよふ様(総 容)への御悦(サカラン)ひチン相良乱くくく



- 第一 下の困窮をつよくし
- 第二 上の欲をまし
- 第三 田沼の腹をこやし
- 第四 諸役人の爪を長くし
- 第五 小判の相場をくるわし
- 第六 南鐮八片の文字をいつわり
- 第七 太平の世をさわかし
- 第八 万民のうらみをつよくし

此外何にても御かんりやくに用てよし

禁物ハ寺社の御普請、惣して物入を忌むべし



- 一 まいないの黄金
- 一 せけん(い)のこんきう
- 一 あかい(い)のかんぞうぶきやう
- 一 松もと
- 一 印幡沼でほつた大骨
- 一 田沼の魔おう

右五味を千河上水にて五ヶ年さらし、牧野大隅を中洲のつき出しにて鈴木町人百姓を粉にし、家主の生き(いき)もをぬき、地主の油をしほり、

大老のよたれにて田沼のあかほとに丸し、^(尾)諸事金にてつゝみ、月々三度ツ、登城前に用て妙なり

伊勢御存知 田沼主殿山城

天明六年ひのへ午の曆 万民之歎因果曆 滅亡 凡百年目

大きいなんかもんの方 此方にむかへて まきそへになる

大みやうしんるいの方 此方みなかぶしまい この上にくます

大たんこまの方 此方の三年 御めんよし

こしそくしにました まいない 金銀

おむまにくわれ方よし とりしまい

さいきやうきたの方 此方何ことも 万よし

いんはぬまの方 此方いくらうめても うまらず

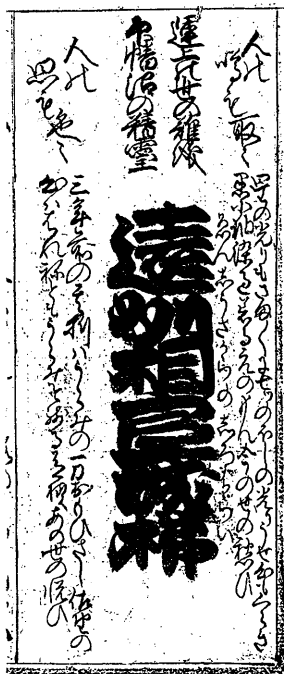
たいせついしやの方 むかいてふちのくいあけ きのみかす

ひようはん下の方 とりくなるワるくち ちくるいとおもへハよし

よいきみかたはしの方 今年より 万年ふさかり



世柄 春ハ火事 夏ハすゞし 秋ハみず 冬ハ困



人の噂も取々
運上の世の難儀
印旛沼の精霊
人の思も色々

遠州相良城 抔

星の光りもさま／＼に、セツのほしの光りうせ、心もくらし黒小袖、染過着る元のものん、今の世の愁ひ
三年前の其折ハ、うらみの一刀おもひさし、佐野の心ハはれねとも、うらみそ残る有様、あの世の悦ひ

第一 高き名も今ハよこれて、とろの
沼へおしこめられし

中の秋

わけもしれすに こうとくしの門
そこで太こか (盛)なつ太郎
とうりで水か出 太郎
いんは沼の夢ハ さめ太郎
水入百姓 おた介
せけんも こまる太郎

第二 元は田より生れたるたくみの事も
水野あわかわれハかわる

元の名□

やたらむせうに 運上取太郎 御加増も今ハ ふうつき太郎
それて何かも あかつ太郎 さそいろ／＼と あんしる太郎
これまての事ハ 今しれ太郎 佐野のやからハ うれしかん兵衛

第三 稲の実のりも春のゆめ
さめて葉かれし

中の秋

少しの内 うれしか郎 はりこんたものハ あわれ太郎
このうへハ とうたん兵衛 身上もひなしに し太郎
いまてハ くやむ太郎 はやく思ひ切ハ よかつ太郎

第四 これ迄のしなした事も皆やめに
成て 此ゆくすへハなにかも

四家老

せけんの事も きい太郎 是から諸色も やすくなる兵衛
それて小間割も やむ兵衛 世上一とふ 悦ぶ太郎
段々運上も やす太郎 世直大明神の霊 佐野の思ひだん蔵

狂言

夢知勢佐野の怨靈

座本
壹番目序幕
腹切座

源治家公 沢村停止郎

御臺所京姫 瀬川古路幸

常盤津周防太夫

（浄瑠璃）
上留り太夫

常盤津牧太夫

常盤津出羽太夫

常盤津掃部太夫

相勤申候

三弦 佐々木筑後

上調子 同 伊勢

轉寢に恋しき人を御臺所、夢てふものを頼てき、ありし姿を其俣に、枕たてる王城の、廿日宵闇祥月の、光りに薄き七つ星の、權威に君を悩せし、にくさの思ひはらさんと、これまであらわれ来るなり、われ八元より天女界、かへる浮世のことわざに、かゝわる身にしあらねとも、餘り世界のくらやみと、上を恨る下々の、おもひを晴し得させんと、しばしのひまを天帝へ、願の加納うれしさに、お恐れながら申なり、もふしもふし治家さま、お目さまして下さんせ、過し天明四年佐野の善子が山四郎、うらみて身をもすて小舟、その頃世上打よりて、佐野を世直し明神と、いふも天より云すなり、それに御心つかすして、去年も御加増その上に、大奥迄も入こませ、おへやと常にみなくくの、さゝやく事の数々を、君ハしらすやあさましき、世の成ゆきとかなしさも、女子の身なれハ天女でも、やきもちとのみ思れん、それかづらさに今までハ、こらひくゝて暮せとも、

地口と狂歌の文字

餘り運上とり上て、下の歎の数くを、見るもつらさに天帝へ、いとまをかふて告るなり、はやく御夢さまされて、宗吉さんの御定を、守らせ給へ是申、御役に成して拾五年、初のほと八人々も、かくあらんとはおもわねと、拾三年の此かたハ、法に過たる我俣を、君ハしらすにうかくと、人のそしりも御先祖の、掟もかまわず加増こと、中の權威ハ下おごり、諸色ハ高く裏くくの、住ひする身も立てかねて、大道中て博奕打、女□ハめぐりにかけまわり、公儀役人諸共に、気まくれといふ慰に、とうせふかうせふ弘徳寺、門ハあれ共あけばなし、夜昼あるくあけくにハ、宿なしとやら無宿とやら、はてハぬすみし火をつけて、命おわるもわきまいたす、たわけを稲葉小僧とも、あらわれ又ハばか林、刑順、日向唐庵の、うつけの医者（マゴ）の薬にて、ふかきためしも悪心の有やらん、まだもつどく言上の、品ハあれ共夫婦の身、とかく御夢さまさせて、軽薄てれんの運上を、止て四海の万民を、あわれみ給ひ是申、もはやむかひの五色の雲、おさらばさらばと、うつゝ共なく夢ともなく、いますことくに声ありて、かたちも見へす床の上、停止郎ヤアラふしぎや今我れ夢ともなくうつゝともなく、しはしまどろむ其内に、御臺の姿あらわれて、我をいさむる言の葉ハ、周防太夫、掃部大夫時ハ今、秋の最中の二十の日、田沼ぬ医者（たのまぬ）のすく入を、二人出して毒薬を、我にすゝむる丸薬ハ、薬となりて本心ハ、くるしみながら世界をバ、ひしりの御代と有徳の、光りをうけて安堵や万民の、すへの木草ものべふして、栄へさかふる君が代の、千代の八千代をさゝれ石

第一番目 遠芻五三年大半記 大老ふり七兵衛
 せりふ 実ハ悪七兵衛金溜

拙者親方と申ハ、先達而御大名様・御旗本様方も御存に御さりませふ、お江戸より五拾里、遠国遠州はい原相良の町を、おすぎ被成ハ神田橋田沼屋主殿、只今ハしくちりましてヒツソリシンカンと申ます、元朝より大晦日まで、おはぎ被成た此とうきんかふと申葉は、むかしより今に至りまして、御用ひあられます、時の武将御聴に達して、お益にもなりそふなもの故、主殿此葉を深くかくし用る人ハ、一箱一包ツ、是をとられ、忽ち御役替をいたしまする、去によつて其名とうきんかふと給る、則文字にも金を盗む功と書て、盗金功と申、只今ハ此はむき殊之外ひろまりまして、上の事ハ申ませぬ、只主殿くくと御よひ被成、慮外ながら在江戸の大名様方、御参勤交代の折からハ、御駕籠を寄られ、此葉何千両となく御遣ひ被成、もし御対客、長崎か佐渡奉行・御勘定奉行なそに御成被成度か、又ハ奥へ御出なさるゝ御方は、かならず御はむきに御出被成い、一ツ橋からハ右の方、神田橋からは左りの方、成り上りでこそござれ、屋作りハ八方たまごかべ、門ハ朱ぬり、家根には七ツ星の紋御免ありて景凶正しからぬ大名てこさる、近年ハ此葉、きくハ、取持ハ、とありて、方々に取るやつか出来て、稲葉の、松本の、赤井の、イヤ前のと申、或はついせうけいはくのやから、その真似をして古今あつましく、ひつたりります、不忠の親方主殿店ばかりハ、朝からのあきない、四方に天水桶・突棒・さすまたを置まして、公用人共替

るくに出ましてあやなします、直段ハ一度の御役替に一箱二箱、又ハ百両式百両、御身上に應じて何百両被下ても、おじぎハいたさぬ、サテ最前から高言ばかり申ても、御存なひ御方ハ天下を丸のミ、大川大水、さらバ此葉を用ひられました次第を申ませう、第一勤め一道の早氣付寄合、再勤成りにくい奥入、無理無体の奥者、やみくもの運上、此いきおいに恐れ入、朝日に霜の消るか如し、ソリヤくくいんくわむくいかまわつてきたぞ、敬順・陶庵はだして逃る、ひらりとまワつて出ると、矢もたてもたまらぬ、サテ甥の能登も引込される、娘ハかへる、親ハしくしる、子ハ切られ、孫くわれ、子切られ子切られ孫くわれ、子供のなき声く、こんく今度の子の不縁、つミ人く大つミ人、あの対の箱ハいつゆるされた、六百石、五千石、一万石、二万石、三万石、四万石と成り上て、ついくついなつた、さきの対箱あの対客ハ、よく金をくれる対客だ、一度の役替に金八百八拾両、御大名・御旗本・諸社山の社僧中、権門駕籠く、沓箱く合羽箱、合て三ツ箱かつたひし、門前群集も此頃迄のいせいかわい、慮生も及ぬ栄花もつきて、今度の御医者殿のはからい、そつほうくよこそつほう、尻からく尻かわれ、彼忠臣の人々は、落たら切てやら、出たらついてやら、悪のむくいハ善三か手初メ、越中・周防、本郷よこ田中にも当時の御家がら、かの先生の膝元さらす、尾張・紀州・水戸の親玉、うどんかくだんか、掃部も手伝ラツト心得、田沼かしくしり、諸人の願ひかな川ほどすぎ、尻がわかれてもヲ、かゝ気味かい、と、老若男女も悦ばぬものハこさります

まい、此しくちりを見て、御心をおやわらぎやつといふ目に出あふた、此度の御評判御存ないとハ云れまい、まいないつぶれく、金出せ銭出せ運上出したももふこれ切りき、たちまちあたつたばちくくくと、しくちりしまへハ印幡の沼も、運上事もやめねはならぬ、よさねばならぬと、いきひつはり、一の忠臣佐野大明神も照覧あれと、天下太平ホ、おさまつて申す



浮高五万七千石
百年目何ほと、問、答て
本高三百石といふ
術に云

天明六ノ六ヲ医者式人の式を以て割ハ、其沙汰三々の三と成其三江浮高五万七千石を加へ、七ツ星の七をかけ、下々の辛九を止る九を引ハ、町人百姓六に云ぬ六と成ル、其六へ五を、さらしの五を掛れハ本高三百石と成る也

水入百姓なむさんほう
田沼へ持込所々ほうく

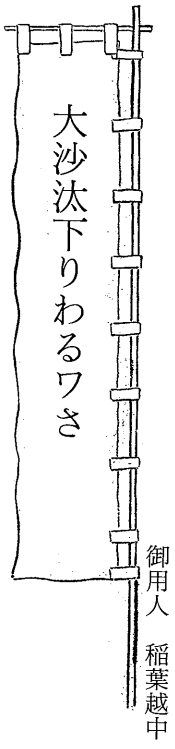
ぼうづくし
お上ハめつたにしわんほう
かまわぬ御三家二本ほう

地口と狂歌の文学

どふても大老大べらほう
江戸ハ水火にあわてんほう
御上の御威光かくれんほう
大名は本でくのほう
松本世けんて大ひんほう
手金を出したハ大てれほう
くほうさん式拾三匁しめほうハ
牧ハ飛田沼ハかるゝ世の中に
井の上へよちのほりたるひきかえる
おもへきやかゝるうきめを三浦とは
今迄ハ日向をあるく医者なれと
式百俵もり込た□そはか林
小間割ハ伊豆ともなしにはれてきて
越中をしめてひる中戸をたてる
けんもん役人皆とろほう
水場の武家町泥たんほう
あぶらがきれてざつとのほう
郡代白河つゑんほう
此度山師ハとちめんほう
おしつけ見せしめ用心ほう

なむ三匁とふかてれほう
何ほと町ハうれしかるらむ
落てまちくゝ元の伊おりへ
主殿家来も庄次千万
同公用人 三浦庄治
田沼家老 井上伊織
同いしや 日向陶庵

若林敬順
勘定奉行 松本伊豆
稲葉越中



図ハ爰に略す

口上(東西)当代(一)諸色高ふハこざりますれと、是より引下申上ます、サテハヤ
 狂歌棒尽し其外いろく御(一)こうし(昔)やの御方様かた、入替くいたさ
 れたれハ、何を仕ましても御慰うすふこざります、然所、此度大沙
 汰下り、よき見せもの、田沼男と申、当時御役御免を蒙りまして、
 皆人うれしかるわさを御覧に入奉ます、先御目通りに差むかい置ま
 したる能登太夫、こなたへ掛置ましたる神田ぼしごへ一段上りまし
 て、白むくを着いたしますれハ、其外付したかふへ(一)つらいかうし(一)や
 のもの共、種々のわる(悪)ワ(業)さを仕尽しまして、彼男段々上江登ります
 に随ひ、下に積置ましたる金銀米銭を手元江引上ケ、中段にひかへ
 ましたる稲葉太夫、手もなく三千石を差上ます、それより弥々(頂)てふ(上)
 へ上りつめますれハ、八方江つなき置ましたる縁の綱、一度にはら
 く(一)きれて一さんにこなたへ落す、これを名付て七曜の星下り
 トツトホメタリ
 アリヤ(一)く(一) サア先の檀那樣ハ御替りく、御老中様方ハあとよ
 りそろく

右之外其時々に出し種々の落首・時口、筆に尽しかたし、関東
 中の狂説故、伝聞も不及事多し、二三を爰に記して(テフ)懲(テフ)悪の一助
 とす

なお野中家本「安明間記」には次のような地口が載つて
 いる。

安明間記 卷末

其頃世上一統に種くさまくなる雑談共有けるか、余り事長くな

りぬる故、数多の中より其三ツ四ツをゑらみて、此処ニしるすもの
 ならし

はなし

山城守殿手疵負れ候二付、御畳大ぶんよこれ候故、取かへ候やう二
 仕るへきやと、御作事方よりうかゝわれける時、まづふひて置へ(扱)き
 旨御挨拶有ければ、さやうには相成まじく候、穢申候得はと申上ら
 れけれハ、いやまたつひでか(か)あろふ

おなじく

善左衛門二、とても山城守殿を御きりなされ候に、何故後より御切
 なされしと申人ありける、佐野殿こたへて、されハ、とてもつらの
 皮之厚ひ人ゆへさ

田沼道成寺

佐野にうらみか数くこさる、諸家の金を取時は、世上むせうとつ(無性)
 まるなり、佐野かしりを突時は、めつたむせうに逃る也、進上の夜
 喰にはし(雑)竹かんひやう(干)、入相にせうめつ(生)なら茶とひく(感)なり、聞
 てかなしむ人もなし、我も登城之雲はれて、親父之罪をかぞへあか
 さん

狂歌

かた先之きす(疵)之其元尋ぬれば 袖の下よりほころひにけり
 運つきじ門にいませし首くゝり 是も切れる(マヤ)五千俵かな
 山城之白の小袖か血に染て 赤年寄と人はいふなり
 山城をうちにきたのゝ吉左衛門 はやくもかけて壱岐対馬殿

二百石は丸二扇之要めいし(かなめ) 対馬之守之あらん限りは

切れなからまたまけおしめいゝ二けり きらハ佐野くゝと逃る山しろ
満ぬれハかくるならぬか世の中ニ いきほひよしと田沼れもせず追加

やくはらひ

おやくはらひませう、ヤアラこんと之吉凶申さは、上はこんらん、下
は豊年、悦(喜)ふ物は八百万人、かなしみするハ二三三人、築地之親は百
年め、庄司か首へ繩を付、伊豆守迄さうりく、御役上りませう

以上

右之如くなる口合数多有る事、牛に汗し車ニ計る如し、其中ニも世
上ニはゞかり多きも有て、又不興する人もあるへくまゝ、是等をは
ふきても尚余りあれ共、品多ければ筆を留おわんぬ

此書は誠ニ実事にしてきよ(徳)をまじへず、中年之人知る処也、後人
是を案すべし、時ニ文政五年五月日、是をうつつ

ここからあとハスペースを節約するために解説目録にす
る。まずは宝暦期の金森騒動から――。内容は馬場文耕ほ
ど辛辣ではないが

○美濃国郡上領分騒〇狂哥其外いろく(葛飾郡
葛梅村相沢家五〇六)まず狂哥に勘定奉行大橋近江守、郡
代青木次郎九郎、老中本多伯耆守、大目附曲淵豊後守と関
係者が登場するが、能番組にひっつけた地口が、他にはあ
まり見られない。

本多の屋敷は 竹生嶋 御殿しきりに鳴動

地口と狂歌の文学

金森 兼平 たゞ御自害有へし

依田 芭蕉 其御不審は御誤り

曲淵 浮舟 しらぬと被仰候共御偽り

大橋 谷行 いたわしながら大法まかせ

堀田 放下僧 この程夢見あしく候程に

大岡 芦刈 この花とさかへ給ひける

本多長州 景清 さもうられまれ候さりし身の

田沼 祝言養老 急き見て参れとの宣旨を蒙り

つづいて「きみやうてうらい」「やつとこまかせ」などで

始まる俚謡が数番あり、「百姓残念七月頃、美濃国より欲之

皮出ル」という年代記、「阿羅物騒 近年未聞 郡上主上

道欲一念……」で始まる南弥陀経があつて、「金森の金や一

口渡り鳥」を発句とする半歌仙につづき、浄瑠璃三下り「新

板恋路の泪友鳥」、次に数人の役者こわいろ、狂哥で結ぶ。

○蝦永代とつてんちん(埼玉郡上平野村篠崎家五二六)

永代橋の崩落は文化四年の事件だが、寛政期から北辺に

異国船来航の報はやかましくなっている。十露盤の割声に

続いて

永代と契りし橋も中たへて(絶) 遠近人の浮つ沈みつ

永代と名付シ橋を深川て 祭り直して短か代といふ

討死と落て死(ママ)をする海と川 ゑぞは箱館 江戸は箱崎

と十首ほど並べ、五大力、忠臣蔵九段目のせりふ、いくつ

か拾うと

日本一のあほうの鏡生捕られし番人 同しかる処は山々こさる 拂道具
 ちやうちんとつりがね松前九千石 それにこそ手たて有 堀田撰津守
 こつてしあんにあたわす 御老中 しかたを爰にて見せ申さん異国人
 はた〜〜 石火矢に当る人 かほとの家来を持ちながら ○印
 爰をしきつてこふせめて おろしやの軍師 (下略)
 それ見たかあんまり欲をなすゆへに 山のよふなるふしのものいり

題「蝦夷地」別条

異人不相識 当坐為金錢 莫謾愁取鮭 老中自無閑
 異人一 來 其目通 人買不 能士止

と漢詩が出る。(返り点、送り仮名は原文に些か手を加えた。)

乱国成 松前計 具足高 米者止
 東変船 戦欲居 兜欲倍 鞠喜休

次の「野爺鯛」というのは、吉備真備が入唐の際、唐人が真備の字才をためすために読ませた字謎の詩「野馬台」の振りである。

野爺鯛之詞

覚定地彼堀 艘初乱大興
 悟師軍趣田 二焼番所夷
 先失当捲旗 船見冲拂 蝦
 陳毒後攻引 筒分心地服

○野暮台之詩(西角井家八〇五)縦横斜に読む詩ばかりでなく、論語、大学の句で闇老をあてこするうとした地口もある。

○回文錦字詩抄(埼玉郡道口蛭田村田中家二一九六)

晋の寶浴の妻蘇惠の織錦回文詩の読み方と講釈を、高井蘭山が解説した十三丁ばかりのパンフレットだが、おもしろいことに巻尾に「此本何方へ参り候共、花積村覚蔵方へ御返可被下候、已上」と墨書がある。この頃の農村にこうした漢詩に興味をもつ者がいたのである。(次頁上段挿絵参照)

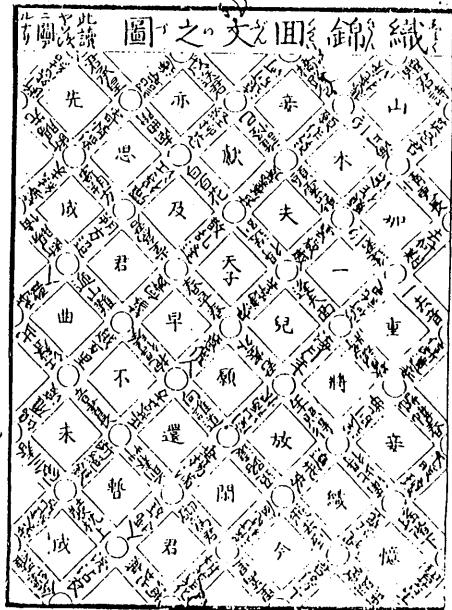
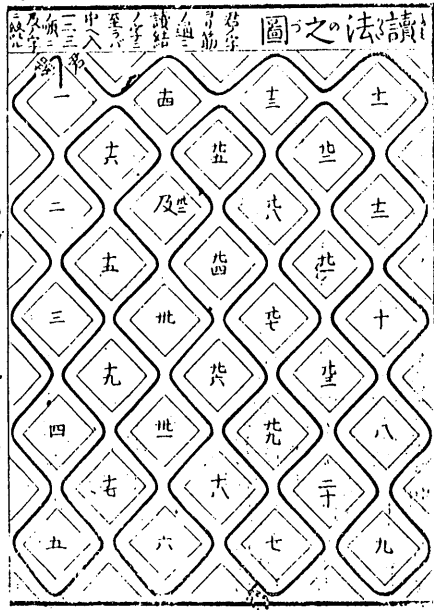
天保八年二月の大塩平八郎反乱一件が全国の庶民を驚かしたことは周知の事実であり、各地の家に大坂来状、大塩氏捨状の写が残っている。中奈良村野中家では、ちょうどこの頃「万書籍出入留」という文書書籍の借用・貸出の記録帳を作っていたので、それを見ると、その年の三月から翌年の閏四月にかけて関連資料を九回も貸出している。それには書状もあり、多冊物の冊子もあつたようで、時を同じくして複数の人に貸出すこともできた。それらよりもやや高度の研究的な資料になるが

○咬菜秘記・酩醒録(比企郡番匠村小室家二九四〇・二九四一)

前書によれば詩歌・落首は書写した小室元長の選択がなされている。随意「地口・狂歌」の類を抜いてみると、ま

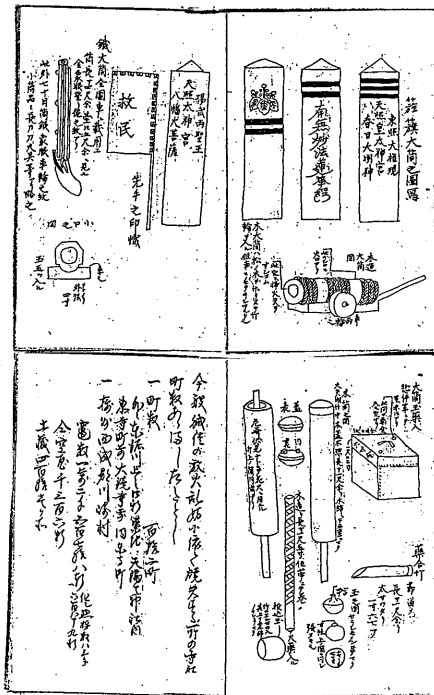
織錦回文詩読みかた (前ページ下段参照)

地口と狂歌の文学



儒者衝嘘元大筒 御蔭類焼為空々

狂詩囃塩平



箆簞大筒之図写

づ「箆簞大筒之図写」がある。元長の友人という涼亭散人の「丁酉二月下洗過浪花有感」と題する詩があり、堪^{タカ}麟^{リン}磨^{シテ}鏡^ニ更^ニ加^フ疵^ヲ 鏡^ノ光^ヲ減^ラ尽^ス黒^ク 似^シ炭^ノの^ク句^ハは、大^ノ塩^ヲ評^スシ得^テヨシと前書に述べる。地口に類するものだけ拾ってゆくと

良智良能不油断 高慢我慢成夢中
 久太頼山 普過遺死愧 捨藏佐藤 一斎 追従悔文通
 嗟同心衆馬鹿等 頓土身命棄無功

はなし

大坂市中を思ふまゝに放火乱妨いたし、夜に入候而高津(仁徳天皇皇孫)の宮に詣、
 神前(根本念)にて観念せしに、不思議なるかな、御扉きいゝと開きたまひ、
 忽然として童子一人出現し給ひ、大塩にむかひ、高き屋にのほりて
 見れば煙たつ、と仰せられたり、其余に御言葉もなかりしゆへ、大
 塩とりあへず、民のかまとも賑ひにけりと申せとも、童子何のいら
 へもなかりしゆへ、亦くりかへし、民のかまとは賑ひにけりと申け
 れは、童子のたまわく、また此うへに下の句をかさねるか、と

二月十九日朝茶湯

向太刀魚細作り 鉄炮あへ焼味噌 汁赤貝焼物 大塩むし鯛 飯今焼ひたし 糧米を用ゆ
 煮物車海老 錫大筒切 吸物鉄炮の目玉 一夜つけ 取肴焼ひたし
からし 香物 人足 笛くわへ神主

道具附

- 一、掛物 天照大神宮一行物但し大盜賊士の筆
- 一、釜 大西常休作 車軸
- 一、茶碗 つく入作 大塩ケ
- 一、茶入 汚名いくさのしよう 藤四郎 近火山 (庄服) しふく焼ケ切レ
御話はふちのらんさわき
- 一、茶抄 瀬田掃部作 銘灰かずき
- 一、香合 鎧櫃

- 一、炭取 一閑ゑんしよう籠但し相手炭ニ 小いつミを組合ス
- 一、建水 楽 吉右衛門 焼前の大脇差
- 一、鳴物しらせ 貝鐘大鞆
- 一、蒸菓子 持丸盆ニ金ン損シ
- 一、饅り菓子 今川家之兜鉢 諸白刃

客組

上座 ヲカシラ

相伴人 組矢鋪
町人

(中略)

俚謡擬文

跡部なにをする 大手をかためるノウコレサこはい中にも上帯をめる
(ママ) しにみかゝるをもサアシングイく
 一夜あくれば鉄炮 石火矢 長刀 棒 土井コレサやれつくそれつく
 大炊くく シングイく
 サツサ落たくく 天神橋までも おせハ御城もちかうなる 大坂天満の
 真中で 天草もときをやつたけれ こんなくせもの見た事はない

(中略)

大火角力初日取組

- 川崎 (四ツ車) 大筒 (石火矢) 追手口 (岸和田) 大橋
- 火ヲ出シ (白はた) 黒雲 (おとろき) 陣まく (早馬) 焼落チ

(中略)

今川好了圓 大筒目 七拾目 自家張本所 中齋堂製 悪者の号也
家伝好了圓 小筒目 十文目

抑此苦為利之儀は往古国々ニ而調名いたし専ラ被行候処、慶長元和之頃より堅御制禁ニ相成、暫中絶仕候、其後肥前島原表ニおゐて勢力有之候へとも、元手薄く一揆尽候由、猶又東国ニ而由井・丸橋之兩人、肺肝をくたき、約味大方相調、店開日限等も相定候処、弓師之手よりはつこほれいたし、誅力ニ而粉薬と相成候、右之輩は焼法に疎き故之儀と被存、我等此度木筒を尽し、火薬夥敷用意致シ、救民を題に遣ひ、秘方ニ一味之上、猶又相紫檀を細末として加味仕、和漢之遺書に不拘、滅方を旨として勢方仕候儀ニ候得共、店開之節は神儒佛之三尊円を不恐、仁義五常円を致兇却、専ラ乱妨を用ひ、持丸金藏丹を掠取る事自在なり、尤世を狂シ下を痛る事殷ノ如シ

功能

第一、産後之婦人逆上する事妙也、小児の恐怖、或は見失ひ申候、老人眼まい、立くらみ、足なへる事妙也、是切りの家質ハ取主ものんと(咽喉)につまる請合、丸焼之者は昼夜妻子と共に愁歎之泪出可申候、小氣成人は立所に病引出可申候、いか程丈夫成人ニ而も、又は間の有之ものも、少しのひく付ハ可有之、別而大病人ハ一兩日の内ニ埒明可申候

用ひ様

各前車のくつかへるを見すにて用ゆ、但シ向ふミすにてもよし

禁物防事

岸の和田おかへ 東山城爪 西伊賀栗 尼ヶ崎尼蛤 堺桜鯛 取罪所

○武州式郷半領大場川悪水吐増坊伏込御普請築留メ石動築唄(大里郡樋口村平山家四〇〇)表紙に上掲の標題と天保四年巳四月という年期と「市村宗四郎様事 月州庵戯作」と作者が書かれてゐる。幕府の普請方が庶民の好きな地口と狂歌をたつぷり利用して、工事の円滑な進行をはかつたといえよう。葛飾郡式郷半領の資料がなぜ大里郡樋ノ口村に残つてゐるかというところ、樋ノ口村御正堰の工事に式郷半領で歌つた唄をそっくり持つてきたからである。式郷半領では

ヨウ、イコウ、ノサアン・ヤアーくくく

奇妙ちやうらい式郷半 天ニも保ツ巳に四ツの年 大場川なる水災難義 坊樋壱ツニ吐口の 縊り目ほどく増坊や 模様も替る落合ハ勾配まさる猿ヶ俣 船入堀より古利根江 順々流くなかれ出て 御普請冥加ありかたく よいこのさんや動築に 女子童子も寄り湊ひ……

とあるのが、御正堰動築唄(同平山家四五六および四六〇)では

有がたや天にも保ツ巳の年の ことしや世かよひあら川の 五堰の二番御正堰 元坊御普請万歳を 御田地相続らくくと 六ヶ作法福俵ら 「是まで水難はからしい」 「夢ものがたりをもふすなら 丑寅風の吹込か 秩父の山く洗ひ出し そりやこそ五尺八尺水 低家の押込二階を逃て ぼちやんくとうんこのみ投げ 瀧小便ひよ

ぐつて見舞のたんこ喰らひ 田畑作物泥あひ倒て 三日湛へては種ものも失ひ 御地頭へねだつても未進の催促……………

いづれも写本だが、巻尾に「行田新町 今津清兵衛印」と書かれたものがあり、刊本をかなり大量に配布したものであろう。

○春雨旅中夢（足立郡羽貫村加藤家二二八）弘化二年十月に寄合鳥居甲斐、天文方見習澁川六蔵、小普請金田小三郎等処罪の文書に地口が付く。

（前略） 流行御連哥附句 九月御会

雲霧の霽て静けき御代の春

諸民

幾千代と祝ふて汲や今年酒

諸役人

只一人洪屋之果に住居して

水越

今宵の月の見る顔もなし

堀大

□^(夢)覚て燈火細し鶏の声

鳥居

消る計の我が思ひかな

同悴

所替我が身之上とおもひしに

長岡

今ハ余所目に見るも氣之毒

庄内

浮立や世間の噂かまびすし

町人

聞に付ても胸にこたゆる

林大

兼而よりかくありたきと思ひしに

諸稼

漸く株に有付し身は

髪結

三年ふり元之姿に成りにけり

辻君

どふで古巢へ帰へられもせず 岡場所
水越は案ふくしらぬ按摩なり

上下もんで腹ハしらない

（後欠）

○おん獅子がり やんれぶし（幸手図書館一四四）刊本。上下に分れた小冊子だが、上の表紙に「嘉永二酉年七月廿七日 代二十四文」と墨書あり。小金原巻狩の解説を唄にしたもので、上巻はその施設と規模、そしてどのように動物を追い込んで捕えるかを説明する。下巻は、日光社参の際栗橋へ作られるのと同様な舟橋が、新利根川に架せられたことを唄にしている。

「てんがさまよりふれいださんと、百せうぶけがたミなのこらずに、^(器量)きりやう^(心算)したいにおい込まする、このや人かすあハせてみるに、凡八万七千人よ、これを首尾能しとげた上ハ、じんを引取ごかぎやう^(船)なさる、武蔵下総其両くにの、あいにながる、新利根川よ、かけてわたせしこの舟橋よ、みるもうつくし橋しやといへど、舟ハ上舩ひらだの舟よ、あまたその舟七十五そ、う、しんきうたせてかけわたさんと、ふねをならべしそのあいくに、ひのきつ^(船)な^(船)にハ八方ぐさり つま^(船)りく^(船)にいかりをおろし、あとよさきよとらぐひふりて、舟の上にとあをだけすのこ、そのやうへにと松ゑたならべ、ともとへさき^(船)に並き^(船)をしたて、ほう^(船)^(船)す^(船)な^(船)お^(船)バ^(船)さ^(船)ら^(船)りとすいて、さてもうつくしこのふな橋ハ、どこのどなたのおふかけなると、これを尋てつくつくさけハ、日光道中越やさいの、村の其なハ松ぶし村に、民部さまと

てたいけなくらし、めうじたいとうごめん(大衆)の名主、高八千石(有徳)うとくなくらし、内(人数)のにんずが七十五人、ご(さま)に同やくなされし人ハ、国(野田)ハ下総其(名)なも高き、のだの丁にて高なしさまよ、音(番頭)にきこへしふげんでござる、ばん(番頭)と下(男女)なんにげしよまて入て、其やくらしが三百(生計)よにん、このや両(人)にんおうけをいたし、さらば是からおてんがさまが、わたりなされし其り(釋々)しさハ、なつのほこりにミつうつごとく、あといつゝいて諸大めうさまや、つゞくはたもとわたらんものと、これをミる人きく人までも、まんごまつだいはなしのたねだサヤンレエ

○獸六歌仙 (足立郡高畑村若谷家二四四三) 卷狩の前夜、小笹の藪蔭で、狸・兎・狐・猪・むじな・小鹿の六匹の獸が辞世の和歌を詠んだという話である。

黒船来航も地口の素材を数多く提供した。

○しん板此浦ぶね評判くとき (埼玉郡上平野村篠崎家四九二六)

(前欠) (念)あつ(狼廻)のろしをあげて、かみ(頁)をふきたてぢんか(種)ねならし、てん(伝)ま(馬)は(早)やぶ(舟)ね(進)ち(舟)うし(進)ん(舟)ぶ(舟)ね(舟)の、かずもかぎりとのりい(種)だされる、大津御ぢん(種)や川(感)ごえ(感)さま(感)の、にんず三万六千(余人)よにん、三(三浦)う(三浦)ら(三浦)み(三浦)さ(三浦)き(三浦)ハ六万人で、ひがし三十三がのくにの、おはたがしらがおかた(旗)めな(頭)さる、う(安)ミ(居)をへたてゝむ(向)こ(地)ふ(感)ぢ(感)ご(感)し(感)ハ、あ(安)ハ(居)と(上)か(上)づ(上)さ(上)のお(台)たい(台)い(台)ば(台)が(台)ため、忍(お)の(し)じ(城)や(主)う(守)し(守)ゆ(守)に(守)会(守)津(守)の(守)こ(守)く(守)し(守)ゆ(守)、つ(下)ゞ(下)く(下)し(下)も(下)ふ(下)さ(下)ひ(下)た(下)ち(下)の(下)う(常)ミ(陸)へ、あ(常)また(陸)か(陸)ゝ(陸)り(陸)の(陸)大(陸)小(陸)め(陸)う(陸)が、か(旗)ぜ(差)に(物)た(物)な(物)び(物)く(物)は(物)た(物)さ(物)し(物)もの

で、ねらひかためる大(筒)づつ小づつ、すわといふたらうち(打)はな(打)さんと、およそそのせ(勢)る十万よにん、そなへみださ(事)ずことげんぢ(重)うに、いさミス(重)んでおかためなざるヤンレエ

○は哥 (足立郡高鼻村西角井家一五七)

(前略)神風もふかは吹、亜墨利加もふらはフレカツト、いまは人めも隠れすに、のり(前)気(前)になりしワシントン、夫を御(前)まゑハ猿(前)しまて、ふつり思ひ(前)きらすの、羽田(前)根(前)されてハ日の本の、神(前)や佛のハツ(前)テイラ、あたりはつれハ鉄炮の、玉のおふ瀬(前)ヲ楽(前)に、千里の波もなんもその、また来るはるのやくそくと、ともに和(前)政治(前)やあすの日と、ゆひおりかぞへてマツテウセト、いたて(前)へ(前)ロリ(前)と舌をいたす

○相州箱根山中温泉場逗留中之記 (入間郡赤尾村林家六七七四)

書写した者に作者と同等の学識があれば、誤脱は少く理解にくるしむ語句はほとんどない。

乱製 滞船散 大筒見 十貫目
秘法 小筒見 五貫目
心見 疋貫目

此薬第一諸家の奢をおさへ武備の怠りを調ひ、何程年久しく気さし候数船に迎ひ候而も、速ニ返船する事奇代の大名役なり、予か家に年久しく持来、試るに其功神の如し、外ニためしなし、依之今度世の人救のため製薬法まで伝授し、広く世にしらしむ、二心なく用ゐて其功を知り給ふへし

薬法

唐大王 参ノ嫌 当帰 武士 困窮 黄金 才覚

右七味細末にして民のしぼり汁にて用ゆ、但シ武士を粉にする

功能

一、蒸気船に碎目まひするによし 一、帆影うすく見え何となく痛ミやせるによし 一、異船碇下シ臣下高ふるによし 一、浦を通るによし

禁物

一、東南 一、暴風

真平売弘所
御免

東都茨城氏製
京都姉小路下ル町福山伊勢大掾
長岡柏山牧右衛門

取次所

〇るり三幅対（安政五年虎狼刺ノ時）（比企郡番匠村小室家四八四

二）

丁数二枚の横長帳だが、末尾に「右平村峯岸氏ヨリ写シ寄ラル、所 笠山識」とある。わざわざこんなものを笠山先生に送ってきた。それは笠山のような学者でもこういう地口に興味をもっていたということである。

やくよけ 八ツ手の木の葉
まよけ 身もすそ川の哥
るきよけ にんにくの黒焼

有合 古つゝらの差荷ひ
間二合 箱のはや桶
取合 天水桶の差荷ひ

差合 同時の申（申）

つき合 若衆こり取

こミ合 焼場の死人

さいせん はやる神仏

前せん 名灸のこミ合

さげせん 早桶の職人

買ず なまいわしのつかミ売

吞ず 水道の水

喰ず 屋たい見世の喰物

引込 くたし薬の看板

にけ込 おく病の他国者

はい込 後家の一人り寝

政治的な大事件とは異なる深刻さがコレラの流行にはあつたろうから、次のような職業的作家の遊びも板木にして採算がとれた。

〇地域買得埋の破留（足立郡高鼻村西角井家五四一八）刊本

（表紙） 身本遠寺大夫

身本冷大夫

はかばをとりうめのはる
地域買得埋の破留

三味線 往太郎

ぎり 急病の見舞

はり 即席の療治

はやり 四手かこの医者

いそかし 穴掘の寺男

うとし 遠くの親類

ひまなし おんぼう（應）

よふせう 鯉節味噌

にんせう 長屋のお百度

おうせう 三日ころりノ病

掛直 注文ノ早桶

高直 白無垢ノ損料

定直 百ヶ日ノ仕切（下略）

さこの河原座

(本文)

四方よもにつるすあをきハツヤ手の羽葉間題うちハヤ ゆふべのひともきのふけ
 ふ こゝろにねん念じま呪じま禁ひの ふだ札や御籙ふう符をはるがすみ ひく
 もおそろしきミ感染わるし うつるとき爪いてつ舞まは甲じき親しん類るい類身う
 ちハ赤間ぜ赤間ひもなく こハ赤間く見赤間まいとむら赤間ひに ゆき赤間のうめ赤間の戸赤間ほん
 のりと にほふ赤間となりのせん赤間やくが そのち赤間らさ赤間へあ赤間か赤間ま赤間なる す赤間
 り赤間のう赤間ミ赤間のあ赤間さま赤間し赤間や す赤間だ赤間れ赤間へ赤間忌赤間ち赤間う赤間と赤間す赤間ミ赤間ぐ赤間ろ赤間に 文字門司が関せ関き
 が関き関か関き関そ関めて は関が関す関間関も関なく関は関る関げ関し関き つ関いて関と関も関ら関い関一
 イ関ニ関ウ関三関イ関四関ウ 五日関つ関ゞ関いて関あ関づ関ま関ば関し わ関た関る関と関う関そ関をつ関く関ば
 ね関の か関れ関も関こ関れ関も関と関み関や関こ関ど関り い関ぎ関こ関さい関ハ関ぬ関あ関ほ関う関さ関へ せ関し関ゆ
 に関よし関ハ関ら関さん関や関ぼ関り た関か関ら関を関も関ら関い関厄関介関が よ関い関あ関と関し関き関を関み
 つ関ぶ関と関ん べ関ん関て関ん関さん関の関後関ぞ関ひ関や は関な関の関に関し関き関の関か関け関む関く関も 取
 て関や関き関ば関ハ関早関お関け関を ほ関う関ら関い関さん関と関つ関ミ関か関さ関ね 布関施関に関手関が関た関の
 日関が関た関め関も 月関ず関へ関な関が関く関お関そ関な関れ関ど ほん関に関せん関住関の関あ関さ関け関ふ関り
 つ関ゞ関く関か関ま関ど関の関に関き関ハ関ひ関ハ だい関く関か関ハ関ら関ぬ関も関ん関と関し関う 埋関て関か
 へ関る関も関き関さん関じ関の 土関そ関う関に関さ関へ関す関り関や関と関り関お関き関も こ関つ関あ関げ関ふ関つ関か
 の関せ関わ関いら関ず 身関す関ぎ関の関ほう関い関ん関と関も関び関き関や 丑関と関ら関よ関け関の関せ関わ関し
 なく さ関れ関ど関も関ない関ぎ関の関し関う関た関ん関ハ
 へ関君関にあ関ふ関た関ハ関な関ア た関れ関し関ら関ひ関げ関の関も関り関こ関して い関ま関にあ関と関か関ら
 ゆ関く関ほ関ど関に ま関つ関ち関の関山関とい関ほ関ぎ関の関 その関か関ね関が関ふ関ち関か関ね関ご関も
 かな関しい関な関か関じ関や関ない関か関いな関ア た関の関も関し関や
 へ関せん関べ関い関百関で関ハ関喰関で関が関なく ま関ん関ぢ関う関百関で関ハ関に関ん関ず関に関た関ら関ず 齒

地口と狂歌の文学

につくまつかぜ香きやく香ただけを そなへものえてわたしの身も こゝ
 にこゝろのすミ紅だ川 またあとからもかう紅ばい梅や焼き つきせずもの
 やもらふらんく

万延元年の桜田門事件でも多くの地口・狂歌が生れたが、
 その中のひとつ

○桜艸凋雪(足立郡羽貫村加藤家二〇三)

ない物尽し

凡およそ世およその中およそない物尽し、数多中にも今年のない物、たんとなひ、上
 巳およそ之大雪めつたにない、桜田騒動とほうもない、そこでとふやら御
 首およそがない、それに少しも追人がない、吾人や二人じゃしかたがない
 引馬およそどこへかうおよそせてない、御駕籠があつても昇人がなへ、御番所と
 こでも留およそてがなへ、浪人少しも弱およそ気がない、脇坂取次出およそてがない、
 桜およそが咲ても見る人ない、茶屋およそこ屋芝居江行人およそかない、唐人咄およそしか丸
 でない、道中飛脚およそのたへまない、伯耆およその噂およそもうそでない、讃岐およその騒
 はおよそしる人がない、言およそ林およそ此およそ節およそ呼およそ人がない、ひたちの室藏およそに宝およそがない、
 一体親父およそが人およそでない、薩摩およその助およそたちおよそ分およそらない、町人金持およそ気がしれおよそき
 でない、老中増およそ供およそみつおよそともない、全体役人腰およそがない、是およそで世およその中およそ治
 らない、夫およそでも先およそまおよそあおよそ軍およそがない、とふだか□がなおよそさおよそけおよそない

親板およそちよほくれぶして

ちよんおよそきりふしといふ

ヤおよそレおよそくおよそ皆およそさんおよそきおよそへおよそてもおよそくんおよそねおよそへ、わおよそつおよそちおよそもおよそ此およそ度およそ伊およそ井およそ事およそきおよそへおよそたおよそよ、桜
 田御門およその其又手およそまおよそへの、場所およそハ□およそらかおよそまつおよそ市の、正表御門およその其まおよそん

五三

まへて、四十七人ミナのけで、すくり立たる十七人て、当時日の出の師直（もろのちゆう）さんを、チヨットちよきり咄し聞ねへ、年ハ安政七ツ（しやんせい）の申（まを）て、時ハ三月上巳之節句、諸国大名の登城の折から、むねの相図の拍子（しやうず）ぎ打て、松の廊下の遺恨しやなけれ共、師直おそしと手ぐすね引て、待つもしらす二向之方より、虎之威をかる人足なれそか、おふい／＼と眉ハ八之字お口ハへ之字、白之股引、对之出立（たいしでたち）、いわずとした時（とき）レ当の執権（しつけん）、師直さんと見るより早く、面もふらす切入る鋒先、騒（さわ）きに恐て太い尾をふり、逃げ出す臆病、跡ハ一人師直さんハ、駕籠の中ニ而思案も跡先、人に突（つ）かれて三途之旅路、首は東にからだハ西に、はなれ／＼の人足なんぞハ、ソコニ壱人かしこに式人、腕がないとか天窓（あたま）がないとか、うろ／＼うろたへ主人の敵を、見ながら逃して屋敷に帰るハ本意カ、無常の風とハいへ共、あまりたわけた始末しやねへかへ、

（中略）コレハおまへの井伊（いづみ）戒（か）て、けさの騒も全く是ゆへ、おのれ人（ひと）りが上ないつもりで、世間の捌も自由にするゆへ、人之怨か（うらみ）つミかさ也て、富士の山よりモチツト高く、伊勢の海よりモツト深く、今ハのあとから非業之事ニ而、死たといふても啼（な）くからすと雞計（はかり）、今朝（けさ）之死（し）めかおそひしやなへかへ、是から皆さん氣を付て、たいていな処（ところ）て引（ひ）のがかんじん、サレハ天下も御運長久、御子孫繁昌様、万之年もまるく治る、御目出度や

次は長州征討

○梅鉢屋内金沢 言葉の花（西角井家八一四）
 奥「チヨイト金沢さん御聞なんし、徳さんと長さんと、もめが出来た
 ざます、どうなりんしたか、御聞なんしたか 金「ヲヤ奥州さん マア
 おはいんなんし、いゝ処へきなました、徳さんと長さんの事ハわた
 しも薄々聞きましたか、徳さんも少しハ手ぬげがあんなんすそうざま
 す、夫はまだおぼこざますから、むりハありんせん（せん）のさ、長さんか
 少しの事をいろ／＼徳さんを困らせなんすそうざます 奥「長さん
 も言甲斐もない、夫に徳さんの親御さんに、いろ／＼セ話になりな
 んした事もあるそうざます 金「奥州さん、ぬしはなんと思ひなん
 すかしりんせんが、わつきヤアつく／＼考へて見いたしたが、是は太鼓
 持の一興さんの細工サマスハ、自分の懐をあつためた計りて、お
 客にいろ／＼の中カ口をきゝなんすから、にくらしうござりんす、
 夫にまた上方に徳さんの本店かありんすとき 奥「夫ハわたしも聞
 て居りイス、其上方の本店の伴頭さんと、一興さんと腹を合せて、
 徳さんの落度を見付て、切当でもさつしやる様にいふそうざます 金
 「なにもあんなにいひなんす事はありんすまいが 奥「金沢さん、
 主も知つて居（ま）な升（ま）アメリカ屋のイキリスさんト徳さんが心安くしな
 ます物だから、夫を上方の大旦那か、なんても直に切れて仕舞（ま）ひ、
 そうして徳さんかわるい／＼と無理計りいゝなんすから、徳さんも
 此様（この）ナ面倒（ま）な内に居るより、向しまあたりへ隠居して、氣楽にくら
 す方がいゝと、夫てハどふするといふ氣で、あんなさるそうざます、
 其替りに御新造さんは上方へ返すといゝなましたら、上方の旦那も

気が付て、頻に若隠居を止めさしつて、是から八万事まかせせるから、内の治る様にしてくれといふ沙汰があつたト聞きました 奥「ヲヤ、夫じゃアあの徳さんも言イ情が立て、安心して居さつしやるたろう、及バズながら一坐のお客様さますから、少しはあんじて居りイした、御やかましようおつス、ドレ身仕舞にてもかゝりイしよふか 慶応二寅年

大正八も三十分^{征伐}に事済て霜々^{みな}までも極のよろこび

小二四^西へ六九事^向五さたやみ

先勝● 長州 仏滅 ● 親玉 友引① 一橋

大安○ 外国人 先負 ● 水戸 赤口● 薩州

春雨^{のかへうた}かりそめに 武士振見せて よわ武者の 鼻毛をのばし 浪花津の 姫にたハむれ 馬鹿らしい 歩兵てさへも人並に ねくら淋しき 氣ハひとつ お立じや のびるし 錢ハなし あまり身まゝ氣まゝになるならば 大しくじりじやなひかないなサツサかへるかよひわいなア (後略)

○御しんはつ供奉御大名役人附くどき(埼玉郡小浜村田部井家一七三六一一七三八) 上中下の刊本パンフレット。

以上の諸資料を見て、浄瑠璃・長唄、ひいては歌舞伎芝居、つまりドラマ構成のしくみに影響されていることが大きいのがわかるが、まづ村々で庶民が自分たちで芝居を上演してみたいと試みる。

○田舎娘情欠落(比企郡角泉村猪鼻家一四八九) 田舎芝居

の台本だが、前狂言の台詞まわしで終始してしまい、肝心のメロドラマの筋書の方は御座形だ。

東西く、高ふハ御座りますれ共、是より一寸御断申上ます、扱今晩爰元日待と御座りまして、村羽ぬけ成若者共取集りまして、お龜のおいちの、光大寺のと取集、御わらくきに所作のまね事を、仕ります、先御目通に扣へましたる若者、只今目出度三番叟のまね事相勤ます、其為口上ア、左様

おいち 光大寺 田舎娘情欠落

地御法度きびしきおりからに、いなかてつかの団兵衛・九郎兵衛、大山だくみの夜ばたらきイヤ団兵衛殿かア、九郎兵衛か、どこへいしやるの、おれハ其元の所へ、そりや又何用で、此頃ハもういつそいけぬいによつて、其元にてらの一ツもしてもらほふと思ふて出た所イヤ其事、此間ハ越中様御法度に付、川越より昼夜役人が廻る、それよふなくさみかましい事ハ一向てきぬ、それは扱こまつたもんだ、なんにもせよ、ちと休もふてハないか、それよかろふ、幸ひ爰によいこし掛と△二人もろとも休みける、なんと九郎兵衛殿、なんぞ山事でもたくもふでハないか、それよかろふ、先なに□よかろふなイヤをれか思ひ付た事があるわい、なんとてまいハはやり明神にならぬか、おれか神主になつてはやらせよふ、そふ□るには爰にこふしてゐた迎も参り^{ます}まいによつて、二人て四五里四方へきこ^える程^{マゴ}となるろふてハない(か)、よかろふ、はやり明神か御座るよし、居て申事ハ居のまに叶、立て申事は立まに叶申よふ、九郎兵衛殿モヲ

四五里四方へ聞へ申たんべい（中略）かゝる所へてつちの三太良（丁稚）若（も）し 神主様、ちつと御願が御座ります、私ハ足がいたみますから、明神様へ御願なされて下さりませ、成程、明神様、若者が足がいたむと申ます、こつちへ通れといふかよい、明神様之まいへ出る、あ、神ハあらたかだそよ、こうべをさけると、きめつけく、明神ハしやくさしのべてうちほろふ □ヨイさがれアイ是ハ神主さま有難御座りますア、これハ立のまによくつた、と、いさみいさんではしりゆく、跡打なかめ二人の者、山もあたるものたなあ、先さ（沙惣）ごが五合、銭が廿四文、先よかつたと悦ぶ所へ、人のあしをととほくと、又くるそへく（後略）

こんどは見沼用水建設の大事業を、劇本まがいの形式にまとめた戯作を紹介したい。作者や登場人物も実名を知りたいのだが、いまだに不明なのは残念なことである。

○御繰回趣見沼雑談南村座（埼玉郡上平野村篠崎家三九）

乍憚口上

東西く高ふ郷（ご）ムり升（さ）か、口上を以申（ま）上（あ）升、当芝居之儀は、長保十三年年中より当辰年迄、凡百式拾九年之間、大八太繁昌仕升段（ま）は、全以太平之御仁政之 御余沢と、難有仕合奉存升、扱切落し時梓又廻し等之大道具大仕懸は、元祖不居和与須平工夫を以相始メ、其枝葉之者共、年頃アノ手此手と定法仕崩し、勝手俣之狂言仕升（ま）した故、末々四座次第二衰ひ水微仕、一統困窮仕升間、当春坐元樹焚文造、頭取十練図多平等ヲ以、奉歎願升た故、此度御仕法皆として、夫々

悪例之狂言御糺し、旧古二復、相統為致との御憐惠、誠ニ難有奉存升、依之右御恩沢冥加為御礼、座中一同相談之上、不束之新狂言取仕組、奉入御覧二升間、仰合、初日より永（えい）当（とう）く御来駕之程、偏ニ奉願上升、為其口上左やう チョンくくくく

月 日

座元 樹焚 文造

第一ばんめ 役人替名次第

利根判官水元美ハ中条行平

見沼ノ悪物操樋ノ明ケ助

新川浅加郎俊

中条 中八

同 獺の穴八

長井 堤

騎西太郎水盛

十練図多平

同 同

根岸 上太

星川三郎水増

利加井小丸

同 出杉之林

市野 三

荒川鯉六登

二丁目彦平

同 天保吞太郎

寺山 栄夢

三間樋四女太

篠津 次平

賤の女ひるも

野田や清八

伏越之後室花渡井

瓦 葺助

書面太綾丸

根岸 惣五

五荷棒のはう四郎

芝山無久利

七面堂投やり

橋間狭間七

早入はね太

番場 長七

毛長別当泥田房

十八五文七

逃樋の建蔵

蓮田 庄八

村長利金太

伊香保昌助

綾瀬の奥方

腰巻 平助

下役無理次

同 権次

腰元はな藻

染や 竹山

小步行遅助

差間 吉次

同 かるも

新田茂左エ門

綾瀬内匠之助

小丸や次郎次

芝川の舟乗棹八

加多や助次

龍井汲平

谷古田古瑤有

芝川の舟乗梶九郎

大間木会藏

河内図之助

落水登免呂

加田屋阿氣呂丸

芝川於知留

渚江邪魔太郎 平や那喜路 同 村雨 高尾 喜門
 赤堀平作 原や 伊三 百姓豊作 応扱合点太
 廿四間関守友八 大作喜甚五 同 富貴松 未和楽太郎
 水見 勇 惣代 太郎 作者 鳩野氣三二述

上るり
 へ夏一季替らぬ空の迎^(向い) 水も差配に在原の哥へかたへの井堀刈真
 菰 見つゝ馴にし悌と 上るりへうつしつるへのそバ風に哥へゆかし
 き淵を白波の よする耕地に世を送る へいかにこの身か隙しやと
 言て 心気恨気に袖ぬれて 上るりへいつか嬉しき耕地もと 君にや
 誰かつけの櫛 さし来る水を汲ふよ 汲上て 哥へ見れハ透こそ淵
 に有 上るりへ堀にも水の入たるや哥へ鋤ハ一ツ へ鎌ハ二ツ三ツ
 哥へふられつも雲の上 爰ハ渚江の松顔に月を荷ふて 四人へ休らへ
 ぬへ見渡せハ面白や 夫ても済ぬ夕間暮 肥取舟のやつしつし 波
 を隔て 殿呼かわすあんまけん ひさちりくけ ちりくけやちり
 くけ 夫くはつと庄屋の眠りさへ 哥へ立名いとハで三とせは
 殊に 済ぬ川辺の夏の引舟 今帰りこば 我も小銭にいざ立寄
 上るりへとうれますも恥かしや 哥へ私身こそ今は黒かれ出初て せ
 めて 上るりへ青田其土地や終から 干拓の手ひもつかるで夫なりに
 二人がそハへ ふみ東懸てぞ頼水事に 上るりへくわいからすのエ、
 何しややら 植たはかりカ浚ふてまでカ 待バかんろの約束を 哥
 へ忘るゝ隙は 上るりへないわい上るりへな 夫から深ふ能へ頼の
 上るりへ水も洩さぬ中くハ哥へ濡に寄る身ハ傘さしてこさんせバ 人

地口と狂歌の文字

の堰傘いつ明ケ傘と上るりへ本に指折其日傘 待に長柄のしんきらし
 それへく 哥へ気をもみち傘白ハれの との田に水をかけ度も 相
 合傘の末かけて 上るりへせいもん真実汲取かちと いわれたら思ひ
 もひらこみんなかさ あほらし 上るりへいとま申て帰る闇のワの^(マ)
 上るりへ熊野坊閉て村為と聞しも けさ見れば先加勢はかり也 上るり
 へ戻るらん 夏の噂は夜くに残るらん

第一ばんめ大切
所作事相勤申候

長唄
常盤津
はやし連中

当ル六月廿五日より

ふり附波登野喜三二

顔見世役者評判記(次頁上段)の刊行はファンを湧かせたもの
 だろうが、徳川幕府の人事を役者評判記の形式にならつて
 評語を加えた怪文書? がある。肖像画を入れたりしたら
 ベストセラーズにもなつたろうが、それこそ馬場文耕の二
 の舞となるおそれもあったらうから、表紙に出版の文字も
 あるが、まづ写本で流布するに止つたのであろう。

○昔々夢の夜はなし(葛飾郡宝珠花村中川家一六七四)

(表紙)

文久二戌年秋出版 昔々夢の夜はなし 初へん

五七



(本文)

三ヶ津役者急勤附評判記

上々吉 沢瀉屋
五万両

山形宗十郎

気性かすくれて居るせるか、何事もやつてのける舞台のこなし、外の御人か古風な事を言たとて、夫を用ひてはいけません、何んても下をめぐんで欲にはなれ、大切に勤めなすつた本元の給金を取返しませふ、先善悪ハ兎も角も、是まてに仕上ケ、親の恥をすゝゐてハ御手柄く

ト、一へ悪によこれしあの一旗を

水野やくめてすゝまます

上々吉 福井屋
価不覚

島藤嶽十郎

一体此人はとふ言気か、先年橘花の親方とセリ合て、若隠居の日蔭者におなりだが、又々当時御出勤にて、今度新名の立者とわ大出来だが、何んにも御前が出なくて芝居の出来ぬ程の事わ有升まひ、隠るせきの内職なら、大体にしてお見切りく

ト、一へ忠を破つて忠立てよふと

常盤御前のあなふさげ

上々吉 巴や
五万両

松山周三郎

押出しハ立派たか、とふも夫程にハ重しがきかない様子、異国の応対ひ杯は、もそつとしつかりとやつてもらふたい、しかし当時の人ハミんな同じ様の人計りかムリ升、おまへ計り悪ひといふてハないが、番頭役なら身を擔て、自分の為てなく、天下の為に命を擱る気てなければいけません、よふぞ国持や外様の人に、わらわれぬ様に頼ミ升く

ト、一へ三ツ巴はたいこの紋で

人かたゝかにやならぬぞく

冒頭の上々吉三人は水野忠精・松平茂昭・板倉勝静かと思われるが以下、中や下々、ひどくどやされているのも含んで十六人並び、最後の座元は將軍徳川家茂らしい。

極上々吉 座元
三川屋

天の川 左馬之助

また年若故、後見や頭取に任せて置いて、気楽のよふに見ゆれと、後見か替りたり、帳元や頭取か引負をしたり、又親方の方からハやかましく言ふし、大体心配な事でハない、中々ゑらひく、早く独前にして御働か見たるよ、殊にひるき連中御待かねて居り升、成たけ座元を外へとられぬ様に御用心く

ト、一々実意つくしてかせひじやいれと

若い亭主と妻のむね

右之外惣座中多人数の事に御座候間、是にて残たるものハ二編目に作り出、差引申候(中略)

主の哥

へあんじつ、したよりちきる御所柿わ 思ひの外に渋かぬけ

て居る

宮の返し

へまた青き蜜柑とあんじ味合は おとろきゐにし紀伊の土たね

補遺

○反古染(西角井家六四六) これは近代に入ってから、同家が東京の古書展覧会で文瀾閣浅倉屋出品の写本を、三十銭の価格で求めたもの。近世北武蔵の庶民の目にふれたか否か明らかではないから、ここにあげるのもどうかと思われが、好資料なので紹介しておこう。文政十年津軽越中守が家格にない轅(ながえ)の乗物で登城し咎を受けた一件に始まり、西丸書院番酒井組松平外記の五人切、西丸炎上、水野越前と水戸公との確執、天保の米高値など、また遡つて延

享頃からの事件を記録しており、筆者は同一人と見られる

が、書店が複数の記録を合綴し書名を付したものである。

西御丸焼失後 大御所様御老中を御側近く被召 大へ扱此度西丸焼

失二付、早速普請申付へし、然而は金高何程入用可有之哉と御尋有

しかハ、御老中得と相考、老へ左様候、凡金高六億程も御入用可有

と申上けれハ 大へ夫二而は質を置にもおよふまる歟

○井呂羽たんか(秩父郡大田部村新井家七一二)

いかな日も人にすくれて朝ねして ろくな心ろももちもせず

はらたちそふな(題)かをして にことわらう事もなし

ほうはたかくてはな(題)ひきく へらくとくちをきく(下略)

そういう「いろは文句」が習字手本の形式に従つて美濃

紙二ツ折の大判の冊子に、一ページ一句ずつ変体がなで書

かれてゐる。まさかこんなりつばな手本で習字を教えた寺

小屋が存在したろうか。うゐのおくやま、まで続いて、そ

れから後はへらへらになつてしまつてゐるから、この手本

自体が戯作なのであろう。補遺に入れるべきものは、まだ

まだあるが、割愛しよう。おたいくつさまでしたというべ

きであろうか。最後は

○かぞへ歌にしきの神風(比企郡番匠村小室家四八四三)

「一ツトセひとつのはしでハたべられぬ もとの日本(にほん)にしておくれ

コノ大きハギ

「二ツトセふきくるにしきのカミ風に 竹もあをいもしをれます コ

ノ大きハギ

「三ツトセミごとにそろうたかミいくさ かななるだつそもたまる
まいコノ大きハギ

(中略)

「八ツトセやだまのとびちるそのなかを わきめもふらずにさつ長(主)
コノ大きハギ

「九ツトセこんなうきめに奥しう出羽 町もぎいけもたまるまい コ
ノ大きハギ

「十トセとうからこうさんしたならバ しろもちきやうもとられま
い コノ大きハギ

今月改東国泰平記 上 竹寅板

「こんどサエ、東(降)く太平はなし もとのおこりをたづねて聞(参)ニ す
ぎし慶応四年の春ニ 京とふしミの其たゝかにいにおそれおゝくも
にしきのはたへ 大ぼうむけたる其天ばつで すでにおゝしうせい
ばつとなり 凡西国中国方の めいしやうゆうしがおゝせをうけて
辰の三月上じゆんごろに 五十よ頭(名)みなせいぞろへ 先ににしきの
其御はたハ 風になびきてさていさましく 一に中国長(守)との大主
高ハ三十六万石で 毛り(利)さまなる其御そなへ……(中略)

おゝしうくとき

「しよけのサエ、御人(種)ず大かきさまニ 行田様(館)にハたて林さま ころが
にまえはし(前)ミぶさまはしめ 凡そ(王)うぜい六万よ人 おゝしうさして
ぞみなせめよせる 一に白川其(城)しろせめハ しかも七月朔日なるが

……(後略)

かくて近世の幕はおろされるのであった。この「にしきの神風」シリーズは小資本の瓦判屋竹寅を有卦に入らせたであろうが、こうした情報工作の黒幕に、後に明治の元勳に名をつらねる何某がいたなどとなれば、ちゃんと話のオチがつくのだろうが、そうは問屋が卸さない。とにかく、こういう「くどき」とか「ちよんがれ」という唄は、文明開化の世になつても、情死やまま子いじめなど農民の涙をしぼる身辺的な題材を唄つて、次々と刊行されてゆく。しかも地方出版で――。

(二九九五・一・四)

